313-5

世代間コミュニケーションを支援する社会システムの構築とアートの可能性

Constructing a social-system by promoting art to support inter-generational communication

山崎 竜二[*1] 藤波 努[*1]
Ryuji Yamazaki Tsutomu Fujinami

[*1] 北陸先端科学技術大学院大学
Japanese Advanced Institute of Science and Technology

We designed a social-system in which children-centric community for dementia care was created. Children performed creative dramas based on the memories of elderly citizens, and communicated with the elderly with dementia by means of the dramas. Art could promote communication between them, and thus help to create healthy community. We elaborate how we designed a social-system in which the negative views towards the elderly (with or without dementia) could be avoided.

1. はじめに

長寿社会を迎える日本では、高齢者の増加が問題として迫り出し、介護を必要とするようにならないようにする対策の必要性が説かれている。だがそのことを鵜呑みにして、もっぱら予防に取組む前に、根本的に何が問題として問われているのかを問いなおすことは、高齢者支援を進める前提として求められる。

戦後平均寿命が延伸し、2055 年には男性 83 年、女性 90 年に達する予測が示されている[内閣府 07]。高齢者が増えてきたことは、多くの人がこうして長生きできるようになった社会の実現として歓迎されるべきことであろう。ところが、介護負担の増大をいかに軽減させるか、その対策が急務の課題となる切羽詰った状況のなかで、高齢者は困難を招く存在として位置づけられ、社会問題として語りだされることになる。しかし、どれほど能力が低下しようとも、決して高齢者の存在そのものに問題があるわけではない。むしろ問われるのはわたしたちが老いゆくことをどのように受け止めるかということであり、問題はその視野が狭められることにある。老いることが問題視され、否定視されるなかで、老いても生きる価値があるのか、そのように問わざるを得ない困難な状況が生じることになる。そこにはまり込むことなく、脱するためには相応の対策が必要である。忌避される対象になってしまった老いへの視野を広げ、老いゆくことへのまなざしを豊かなものに育むこと、それこそがわたしたちの取組むべき課題である。

高齢者の増加が問題視されるなかで、喪失した老いの価値を見出すことに課題を再設定した。その際に、認知症の人との関わりに光明を照らすことができるかということは、老いの捉え方を考える試金石として大きな課題になる。たしかに認知症は能力の著しい低下をもたらす。そして一般に、自然な老化とは区別して病気として認識するように知識の普及が行われている。しかし、病気として問題と捉える前に、認知症をひとつの生き方として考える姿勢が必要ではないだろうか。というのも、なってはならないものになった問題を抱えた人として捉えられるかぎり、認知症の人への汚名（スティグマ）が根底から払拭されることはないからである。認知症を人の生きることのうちに置きなおしたときには、緩やかではあってもできないことを増す老いについての捉え方がどれほど豊かに育まれているかということが問い返されることになる。求められるのは認知症にならないことを目指すのではなく、むしろ他者と共に生きるなかで、どのようにして認知症になっていくかを考える発想の転換であり、ひとりではできないことを増して他者と共に生きるための知性を育むこと、そのための社会の仕組みを築き上げていくことである。認知症を抱えるという人の生き方を受け容れられる社会的知性の成熟に向け、予防的な取組みは準備期間を設けるものと位置づけられるだろう。

社会の動向を見渡せば、たしかに増加する認知症高齢者への対策が焦眉の急となっている。将来推計でみた場合、認知症高齢者数は 2005 年の 169 万人から 20 年後にはほぼ倍に達し、ピークを迎える 2040 年には 385 万人に及ぶとされる[厚生労働省 02]。介護保険制度の改正により認知症の予防、介護予防に対する重点化が進められ、行政課題として予防事業の展開が喫緊の課題になっている。しかし、この進め方次第では、高齢者に認知症や介護を要する状態になってはならないとの不安を煽ることになる。さらには認知症の人が努力不足として咎められたり、落伍者とみなされたりすることにもなりかねない。そこで実際に、市と大学の連携協定に基づいて施策として進める予防事業の展開方法について検討し、事業の可能性と方向性を探るものとしてプロジェクトを進めた。構築する社会システムは、そのなかで高齢者の経験が価値づけられ、認知症の人が受け容れられる地域のコミュニティが創られることを企図して設計した。認知症に関心のない人々をどのように巻き込んでコミュニティを育むか、その仕組みを築くことが大きな課題になる。

2. 世代間コミュニケーション・プロジェクト

2.1 ケアの文化を育む

認知症に特別な関心も責任もないような子どもを中心に据え、周囲の大人を巻き込んだケアのコミュニティを創るアプローチをとった。認知症の人を中心に据えて支援することを考えるのが一般的であるが、一定のまなざしのもとに置かれた認知症の人に対して一方的な支援の関係に陥りやすい。むしろ認知症の人も含めて、子どもに注がれる周囲の関心がどのように引き出されるかを考え、他方で子どもが高齢者に向ける関心を引き出し、そのなかで認知症の人の支援を考えることを狙うかたちで双方向的なケアの関係構築を図った。ケアの相互性を重視したものである。認知症の知識普及が進められるなか、こうした住民同士のケアが、専門レベルとは一線を画したところで進められるものであることについては言及しておかなければならないだろう。

子どもを中心に据えたとき、専門的なケアを押し付けるわけにはいかない。医学的な知識を簡易化して提供したところで、特に認知症で困っているわけではない以上、それは子どもにとっ

連絡先: 山崎 竜二, 北陸先端科学技術大学院大学, 〒923-1292 石川県能美市旭台 1-1, E-mail: ryuji-y@jaist.ac.jp

て必要とされる魅力的なものではない。認知症を問題になる病気として取り上げるのではなく、生き方として考えるという本プロジェクトの趣旨からすれば、生きることのうちにある老いることについてどのように捉えるかを子どもたちといっしょに考えることが大事なことになってくる。そこで保護者や地域の高齢者もまた子どもと共に、たやすく手には入らない老いについて考え、その大切さを見出す価値観を創り上げていくことが必要になる。なぜ老いることには価値があるのか、その決まった答えのない問いについて、子どもをはじめ地域住民がみずから考えることによってケアの文化を育んでいくこと、そのことが目標として掲げられる。認知症に端的に示されるように、忌避の対象になっている老いの価値を見出していくことは、長寿社会を生きる人々が互いの人生を豊かなものにしていくために欠かせないことである。

2.2 プロジェクトの目的

平成 18-19 年度の二ヵ年度、モデル地区の小学校を舞台としてプロジェクトを展開してきた。施策として進める際のプロジェクトの目的は、高齢者の秘めた力を教育に活かしながら認知症の人が地域で受け容れられる社会システムを構築することである。この目的は、次のように三点に分けられる。1) 高齢者の認知・情動・意欲など精神機能に訴え、秘めた力を引き出す。2) 高齢者の力を有効活用して、子どもへの教育との相乗効果をもたらす。3) 子ども・保護者との接点から、認知症を抱える人の身近な理解を促す。これらのなかの 1 については、もともとの予防事業の趣旨にもっとも合致するものであり、高齢者が力を発揮する機会を奪うことなくエンパワメントを図ることになる。回想法を主な手法として参照して展開し、認知症になっても残りやすい高齢者の長期記憶や情動機能に働きかける手法を用いた。

なお、プロジェクトは市の施策として展開するものであり、市の認知症予防・介護予防教室に通う特定高齢者への施策も必要になる。一定期間後に高齢者は教室を卒業することを余儀なくされる制度であるため、その後の行き先を確保することが求められる。市内各地の小学校におけるプロジェクトの展開へと発展した際には、卒業後の受け容れ先になりうるものとの狙いもある。

2.3 カリキュラムへの導入

プロジェクトを進めるうえで、小学校側が地域の高齢者と交流の機会を設ける際に適切な時間を協議して、総合的な学習の時間に導入するかたちをとった。実施期間は、平成 18 年度が 12 月から翌年 3 月まで、平成 19 年度が 9 月から翌年 3 月までの間である。二年目には約半年の期間を設けて、児童が高齢者をより身近に感じることができるようにした。学校は評価の行われる場であるという制約があるため、放課後の学童保育における遊びをテーマとした交流の場も並行して設けた。

対象学年は毎年 4 年生に定めて進めた。高齢者像が固まり、ネガティブに転じる時期であるという理由のほか、カリキュラム上もともと児童は昔の道具や地域の歴史を学習することになっているため回想法の手法を利用した場合に高齢者が入りやすいこと、そして総合的な学習の時間において福祉体験を行う時期であることが挙げられる。本プロジェクトでは、認知症ケアのコミュニティを創るうえで児童の存在に加え、児童による演劇を重要なアプローチとしている。その点で、地域差があることは言うまでもないが、もともと学校行事において 4 年生児童が演劇を披露する慣例は利用すべきものと考えた。学校行事との兼ね合いを考慮することはプロジェクト遂行上、重要な要素になる。そして何より、学校のカリキュラムにプロジェクトで築くシステムを導入することで、世代間のコミュニケーションを促進するプログラムの実施が継続しうることのメリットは大きい。

Fig.1: model of creating children-centric community for dementia care

3. 社会システム構築によるコミュニティ創造

3.1 システムの基本構図

子どもを中心に認知症ケアのコミュニティを創るアプローチは、Fig.1 に示されるように 4 段階を踏んで進められる。一連の流れの骨格は、児童が高齢者の体験談を物語としてまとめ、その創作劇の上演を通じて認知症高齢者との交流を図るというものである。物語の創作過程に主に一般高齢者が語り手として携わる。聴き取った内容をまとめて披露する段階では、児童はその保護者や一般高齢者が支え手になるかたちで認知症高齢者とのコミュニケーションを図ることになる。その際、創作劇はコミュニケーションの媒体として活用されることになる。

各段階について、具体例もまじえて見てみると次のようになる。

(1) 高齢者の記憶を紡ぎ児童に伝える

グループワークを中心に、さまざまなテーマを設けて地元の高齢者が馴染みの深い事柄について語り合い、児童に伝える。具体的には、平成 18 年度には昔の仕事、昔の遊び、自然環境、年中行事をテーマにして、博物館の諸々の道具を用いながら、児童が昭和の暮らしに関して高齢者の回想内容を聴き取った。平成 19 年度には縄を使った暮らしやそれを売りに行くのに使い、いまは廃線になった鉄道にまつわる思い出が語られた。児童と高齢者がいっしょに地元の神社や博物館に出かけて対話することも行われ、そして戦争の時代背景についての語りも求められることになった。

(2) 児童が高齢者の記憶を再表現する

聴き取った内容のなかで児童の心に残ったことを絵や文字にして表す。児童はそれぞれ描いたこと、書き記したことのほか、グループとして新聞などのかたちでも作品化して、高齢者に思い出の語りの返礼を差し出すことで相互交流を深める。

(3) テーマを絞って思い出に基づく物語を創作する

さまざまなテーマを取り上げてきたなかで、児童がもっとも取り上げたいテーマをひとつに絞る。実際、平成 18 年度には昭和 9 年の大洪水が取り上げられ、平成 19 年度には廃線になった鉄道の思い出が取り上げられた。児童はそれぞれのテーマをより深く知るため、テーマに即して高齢者をあらためて招いて話を聴いた。そこから、第 2 段階で表現された絵などの作品を活用して児童によるシナリオ・ライティングが進められる。この段階で脚本として物語をまとめるアドバイザーの参入や支援ツールの活用が求められることになる。劇団関係者など、アーティストの参画により高齢者の思い出のアートの魅力がいっそう増すことになる。そして、世代を越えたコミュニティにいっそうの広がりがもたらされることになる。

(4) 創作劇のテーマで認知症高齢者との交流を図る

創作した物語を劇のかたちで表現する。劇の披露の際には物語のもとになる話をした高齢者を招くとともに、当時の体験をより豊かに持っている人として、施設に暮らす認知症高齢者も招く。認知症高齢者とは別途対話の機会を設け、交流を深める。

上記のように、昭和の記憶を物語として紡ぎだす過程を通じて、地域に暮らす高齢者の経験が価値づけられることになる。近代化が進み、たとえば農業ひとつ取ってみても高齢者の経験に意味が見出されにくい社会になっている。縄をなうような行為から、それがどのような暮らしのなかで行われてきたことなのか、そしてどのような時代を高齢者が生き抜いて老いを迎えることができたのか、そのような回想を次世代につなぐかたちで活かした高齢者ケアのあり方がここにはある。老いを考えるとき、経験の意味や価値というものを見出すことができるか、そのことが問われることになる。

市の施策としては予防事業であるが、事業を世代間コミュニケーションの促進へと展開した。高齢者の経験に焦点を合わせ、子どもに対する経験の思い出の語りのなかで単なる予防の目的を超える積極的な意味づけが行われることを企図してプログラムを組んだ。その際、回想法の手法を利用して追究したのは次の点である。「回想法は話し手にとって楽しいだけでなく、聴き手にとっても重要である」[Coleman 94]。聴き手にとって回想の内容が貴重なものであることに加え、その語りが経験を価値づけるものであり、そのことが老いの価値を見出すためには重要なことになる。

3.2 地域で老いについて考える

一連の流れのなかで老いの価値を見出すことを促すシステムを築いてきた。前半、児童は一般高齢者との交流を中心に進めてきたが、物語の創作後には、一般高齢者の似顔絵で老いを描くといったことから、施設訪問などの追加プログラムを設けて認知症高齢者との交流に軸をずらして進めてきた。

認知症の話をする段階で、平成 18 年度には接し方について学ぶ場として一定の成果を収めたが、課題もまた明らかとなった。その話の要点は、認知症は病気であること、そして認知症になっても何も分からなくなるのではなく感情は長く残ること、であった。そのほか接するときは「ゆっくりと大きな声で」とか、同じことを繰り返し話しても「さっき言った」などとは言わないようにすることとか、基本的な注意事項を告げた。この注意点はよく伝わり、セッション後の感想文にも非難の言葉を言わないようにする配慮をしていたと記す子どもが多くみられ、話の成果はあったと考えられる。とはいえ、その後の感想文では、模範的な回答を記す子どもがいる一方で下記のように記す子どもが多くみられた。

「私はにんちしょうにぜったいかかりたくないと思いました」

「にんちしょうでゆっくり言わないと分からないのがかわいそうでした」

「ちょっとまえにいったこともわすれてもういちどきくのがへんだとおもいました。それで、わたしは認知症になるとこわいなとおもいました」

「ものわすれがひどくなったりしていくので、にんちしょうはとってもこわい・・・ぜったいなりたくないです」

半数の児童が「かわいそう」「こわい」「なりたくない」と記述し、認知症の人への哀れみや認知症への恐怖を示したことは検討を要する課題になった。大人の持っている知識を与え、一方的に教える態度で臨むことに問題はなかったか、その点を考える必要が生じてきた。認知症を病気とみなし人としてのあり方から切り離してみても、認知症そのものはなってはならないものとみなされている以上、問題を抱えた人として位置づけられる構図は解消されない。医学的な知識を簡易化するかたちで、専門的なケアの延長上で知識の普及を行う発想の限界が示されている。そのやり方では認知症を生き方として考え、ケアの文化を育むことはできない。

そこで平成 19 年度にはこの部分のプログラムを組み替えて、玉手箱を開けて突如老人になった浦島太郎の物語を題材に、老いについて考える機会を設けた。老いることは罰なのか、そもそも老いとはそのようにたやすく手に入るものなのか、そして人と共に老いてゆくことの大切さを考えることになった。児童だけでなく、その保護者やプロジェクト参加の高齢者も集って、この決まった答えがあるわけではない問いについて考えた。このように地域で老いについて考えることにより、いまはまだない老いゆくことへの価値観を育む自治体の創造がいままさに求められ、進められているところである。

その後、プロジェクトの最終段階として、認知症こどもサポーター養成講座を設けた。一方的に知識を提供するのではなく、遊びをテーマに子どもたちが認知症高齢者といっしょにしてみたいことを語り合い、実現するときの困難を考えるかたちをとった。講座が夢を創る場になることを目指した。そのような講座が子どもだけでなく、大人向けのサポーター養成講座においても活用されることによって、認知症の人を問題視するのではなく、誰にも共通の生きることとしての認知症の課題が別様に浮かび上がってくる可能性がある。この先、夢の提案の実現へ向けた子どもボランティアの活動が進められるようにする工夫を加えることも必要であろう。

3.3 アートが促進するコミュニティ創造

本プロジェクトでは、子どもを中心に据えて認知症ケアのコミュニティを創るアプローチをとってきた。子どもを取り巻く周囲の大人で、認知症には特別関心のない人々をどのように巻き込んでコミュニティを育むか、そのことが大きな課題であった。子どもの存在だけでなく、高齢者の思い出をアートとして創作していく過程、そしてそれを劇のかたちの作品として演出することが人々の関心を呼び込む魅力として作用することは注目に値する。

もともと認知症に関心のある住民が集うときには、切羽詰った状況で問題を話し合うことになりがちである。しかし、忌避の対象から転じる価値観の創造を目指し、認知症を問題以前の生きる課題として考えていくには、いかにして関心のない人々を巻き込んで考えを進めるかということが重要になる。その誘引力を持つものとしてアートの力、その人をつなぐ力を活用することは大いに有益なことであろう。実際、プロジェクトでコミュニティを創るうえでその力は発揮されたものと思われる。伝えられた思い出が劇化されることより、高齢者にとっても、そして保護者にとってもそのアートの力が引き寄せなければ出会うことのない認知症の人との交流へと誘われることになる。そして、プロジェクト全体を通じて作品化を目指す過程を経ることで、アーティストや保護者の世代が新たに加わる可能性も秘められている。

回想劇に関しては、イギリスからヨーロッパを中心に発展し、高齢者が自身の記憶を劇化し上演しているものがある[Schweitzer 07]。日本の風土や制度に適したスタイルを探りながら、普遍的な事柄を抽出していく作業も必要であろう。未開拓の領域を探り、少なくともシステムの基盤を築けたことは成果である。システム構築により学校、児童館、博物館、老人会、高齢者施設、ボランティア、アーティストなどのネットワークが広がっ

ている。上演された創作劇は映像として収められ、その利用も可能になる。市内三箇所の介護予防教室には回想法を導入し、二ヵ年度そのセッション時の材料として活用されている。作品の各地でのアーカイブ化が進むことで高齢者支援事業が地域振興として進展すること、そしてアーティストによる創作支援の事業化が進むところでは、新たなサービス産業の創出へと結実していくことも考えられる。そこにはアートが人をつなぐ魅力を活かす技術の開発という課題も生じてくる。

4. アンケートの結果

子どもを中心に周囲の大人を巻き込んだコミュニティを創る点で地域住民がプロジェクトにどれほど関心を寄せるかということは重要になる。地域住民の参加意欲をみるため、全校の恒例行事で劇が披露された際に保護者と高齢者を対象に無記名でアンケートを実施し、全体で 57 名の回答を得て、Fig.2 のとおり評価を得た。予測として有意義であることは認めるが、ほとんどの人から自身の参加は見送るとの回答が寄せられるものと思われた。有意義ではあるが参加は見送るとの回答は約 2 割あったが、参加意欲を示す人の割合は保護者と高齢者の合計で見た場合も、両者を分けて見た場合も 5 割以上であった。

それから、老いについて考える機会に子どもの参加の意義を問う項目においては、高齢者からプロジェクトに参加していたか否かによらず 100%の賛同が得られた。また、4 年生児童の保護者からも賛同の同じ数値が示される結果になった。

5. 考察

回答者の全体で、プロジェクトの意義に関して 8 割を超える賛同を得たこと、そして参加意欲に関して約 6 割の賛同を得たことが今後の展開につながる大きな成果として認められる。他方で、自由記述回答のなかでは、聞き知ってはいても声がかからないので参加しにくい。たとえば、一定年齢以上の人には一律に声を掛ける仕組みを求めるといった具体的な提案がなされており、改善すべき課題も示されていた。

これまでプロジェクトへの参加を募ることは個別の人脈をたどるかたちで進めてきたが、老人会の組織的な取組みとして取り上げられるか、現在、会で検討が始められており、市の支援のあり方についても検討が進められているところである。今後、高齢者側と学校の関係調整を行う際に、一定期間であっても社会福祉協議会のコーディネートする役割が求められることになる。アーティストや NPO の活動として、その役割が担いうるものかどうかを探る必要もある。福祉と芸術が出会うところに、今後新たに専門性を発揮する分野が開拓されるのではないかと考える。

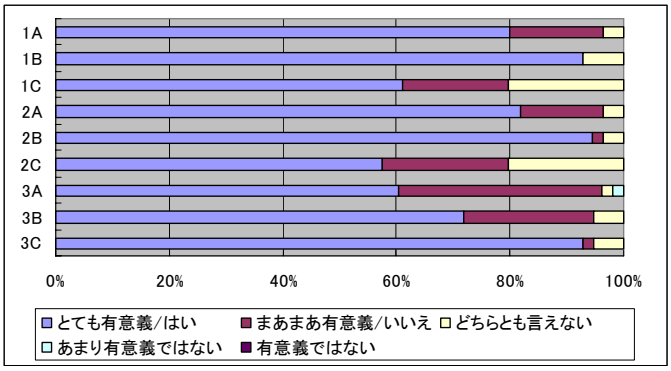
6. まとめ

本稿の主張は次のようにまとめられる。高齢者の増加が問題として迫り出してきた社会においては、何よりもまず高齢者の存在そのものは何ら問題ではないことが確認され、さらには支援されなければならない。とりわけ高齢者支援の施策の展開にあたっては、その点について充分に配慮し、高齢者の存在が否定されるような見方を助長することがあってはならない。 現在、 認知症や介護の予防事業が重点化されるなかではなおいっそう慎重さが必要である。

根底の課題として老いを否定の対象とする見方を転じる価値観の創造に取組むことが求められる。老いの価値を見出していく手立てとして、 プロジェクトでは高齢者の経験に価値を置き、思い出のアートとして結実する実例を示した。子どもを中心としたコミュニティが創られるなかで、地域の人々が認知症を問題の病気としてではなく生き方として考える文化を育み、そして老いへのまなざしを豊かなものに育む機会が得られることになる。

子どもと共に周囲の大人が価値観を創造していくため、コミュニティ自体をどのように創り上げるかを考える際に、アートの人をつなぐ力が有効である。アートにはコミュニケーションの促進力が秘められており、その力を発揮する仕掛けとなる社会システムを構築することにより、ケアの文化を育む礎が築かれる。今後は参加意欲を持った人や関係者のネットワーク構築が課題である。

Fig.2: 地域住民へのアンケート項目と実施結果



1. 思い出を次世代に伝える取組みについて
   - A 有意義だと思われますか
   - B 今後も継続を希望されますか
   - C ご自身も参加を希望されますか
2. 思い出に基づいて物語を創作・劇化することについて
   - A 有意義だと思われますか
   - B 今後も継続を希望されますか
   - C ご自身も参加を希望されますか
3. 地域で老いについて考える機会を設けることについて
   - A ご興味をお持ちになりますか
   - B 有意義だと思われますか
   - C 子どもの参加は有意義だと思われますか

謝辞

本研究は、北陸先端科学技術大学院大学と石川県能美市の学官連携協定に基づく「認知症高齢者の増加を防ぐための環境システムの構築」プロジェクトとして行われ、能美市の支援を受けた。また、文部科学省「グループワークによる知識創造教育」公募提案型研究助成における「世代間コミュニケーション・プロジェクト」としても行われて支援を受けた。そして研究の一部は、文部科学省知的クラスター創成事業石川ハイテク・センシング・クラスターにおける「アウェアホーム実現のためのアウェア技術の開発研究」プロジェクトの一環として行われたものである。

参考文献

[Coleman 94] Coleman, P., Reminiscence within the study of ageing: the social significance of story, *Reminiscence reviewed: Evaluations, achievements, perspectives*, Open University Press, 1994

[Schweitzer 07] Schweitzer, P., *Reminiscence Theatre: Making Theatre from Memories*, Jessica Kingsley Publisher, 2007

[内閣府 07] 共生社会政策統括官, 高齢社会白書, 内閣府, 2007

[厚生労働省 02] 高齢者介護研究会報告書, 厚生労働省, 2002